

Title	編輯を終へて
Author(s)	山本, 檜信
Citation	懐徳. 1935, 13, p. 59-61
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88942
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

參詣焼香し、内藤乾吉先生の御好意にて貴重
の御藏書を拜見す。

▲六月二十七日

午後七時三十分より期末茶話會開催、出席者
五十餘名、阪倉先生の能樂の話、成田先生の
農業の話、武藤先生の外人旅行記に見ゆる豊
臣時代並びに江戸初期の大阪の話、仲田君の
和歌の話あり、丸山君詩賦を論じて楠公を詠
する詩を朗吟、成田先生は即座に詩を作つて
吟せられる。田中女史が詩吟の効能を説いて
三勇士の詩を朗吟して批評を求め、吉田先生
は寒山寺夜泊の詩を支那音で朗吟せられて興
愈々湧く。時に雨聲蕭蕭として降る。太田君
會計を報告、午後十時閉會する。

編輯終へて

山本 楯 信

世の中の人々は古きものに慊らず、新しく力強
きものを求め頼らうとしてゐる。其の叫びに應
へて雄々しく立ち上つたものこそ、我が日本帝
國であつて、聖明なる若き 天子様を上戴き、
正直に明朗に勤儉産を治め、東洋平和の爲め世
界和平の爲めに、躍進を續けてゐる。黒色民族
は野蠻なるが故に征服すべしと豪語し、或は天
産豊富の他國の領土を占據して、我が物顔に振
舞ふ白色民族は、却つて人の風上にも置けぬ品
性の卑しき精神的劣等民族たることを暴露せる
もので、塗炭の苦みにある生民を濟ひ、逆境に
あられし皇帝を擁立し、五族協和の樂土を建設

せんとする我が滿洲事變に比して雲泥の差がある。我は勝つて傲らず正義人道に悖らず、常に反省しつゝ前進向上しつゝある、それでこそ身に反さうして縮くんば千萬人と雖も吾往かんの大元氣が出て來るのである。崇高の精神に基礎づけてこそ始めて眞の大發展を成し得るものであることは、我が大阪に就ても言ひ得る。

悠久の昔より以來三千年、大和山城の門戸となり、三韓隋唐と交通して大陸の文明を傳來し、商工業の中樞となりて權勢に媚びず、勇往邁進、能く有無相通じて自らも利し他をも利し、聖帝の都し給ふ處となり、英雄の天下に覇を稱する處となり、徳川初期既に海外に雄飛する商人あり、三百年來安らげき眠りの夢破られし維新以後、國力の非常な發展に伴ひ、東亞に於ける

商工業の中心となり、最近に至りては世界に於ける物資を集散して、生産品の波及するところ、世界の隅々至らぬ所なからんとする勢である。此の大發展の裏面には、隠れたる教育の偉大な力がなければならぬ。それは大阪の町人が協力して創立し、町人の品性陶冶に力を致すこと二百年、今復再興せられて已に二十年、日新月歩、聖經賢傳を講義し東西の學問を研究して倦むことなき我が懷徳堂の存在によつて、其の一端を知ることが出来る。歴史に埋れたる事蹟を一々尋ねて列擧する暇を有せぬが、聖徳太子が四天王寺を此の大阪の地に建立せられたのも、大楠公を育て豊公をして大を成さしめたのも因縁淺からず、大阪の人士の背景あつてのことである。我が懷徳堂は斯様の好學向上の精神と、實行尊

重の大阪根性を凝固して成れるものゝ一にして
市民の修養大阪の文化に寄與するところ少から
ず、聴講者と嘗て聴講せし者との有志が、會員
の親睦と本堂事業の翼賛を目的として團結せる
我が堂友會の機關雜誌「懷徳」も回を重ねるこ
と十三、今回も前京大總長小西重直先生を初め
諸先生の玉稿を賜はり、微弱なる我々の力で出
來ぬ立派な會誌にすることの出來たことを感謝
する次第であつて、會員諸兄を益すること亦多
大であることを信ずる。故内藤湖南先生が日本
の大學者を數へて、五指を屈すれば其の一に當
ると激賞せられし舊懷徳堂の生んだ我が大阪の
町人學者富永伸基の遺文を、吉田銳雄先生が拾
輯せられて秘藏せらるゝを乞ふて掲載し、現代
大阪の生んだ町人學者石濱純太郎先生の仲基に

關する論説を併せ載せて、出定後語翁の文、及
び多年探し索ねて不幸未發見の著述「說蔽」と
共に、富永伸基全集の發刊せらるゝ機縁を作る
ことを得れば望外の喜びである。前號に續き舊
懷徳堂の記録を附録として湮滅を防ぎ、後世の
人をして偲ぶ資料とした。來秋の再興二十周年
には種々の記念事業を計畫してゐるので御援護
を希望する。

吉田先生の懇切なる御力添えによりて、初め
て本會誌が發刊せられたのであることを追記す
る。

